

ハワイにおけるピジン英語の発達に見る 日本の英語教育の可能性（Ⅰ）

——日本語の影響について歴史的検証を踏まえて——

本 多 吉 彦* 鈴 木 邦 成**

The Development of Hawaiian Pidgin English and its Possible Application to English Language Education in Japan Part I:

The Effects of Japanese on Hawaiian Pidgin English

Yoshihiko Honda and Kuninori Suzuki

要 旨 本稿の目的はピジン英語を分析することにより外国語としての英語を学習することの可能性を探っていくことにある。その事例研究の対象として主にハワイの日系移民の英語を取り上げ詳細に分析することとする。

ハワイにおけるピジン英語を詳細に分析していくためには、その歴史的、文化的な背景を踏まえての理解が不可欠となる。したがって本稿ではハワイにおける英語の発達をハワイへの移民流入の過程を展望しながら捉えていく。そして歴史的、文化的な背景に対する考察を十分に深めたうえでハワイで使われる英語（ハワイ英語）にどのような特徴があるかを日本語からの借用語、さらにはハワイ英語独特の文法などを紹介しながら展望していくこととする。本稿はその前半部に当たり、後半部となる『ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性（Ⅱ）』では、ハワイ英語についてのより一層の分析を行い、合わせて日本の英語教育の未来図に対する提言も行うこととする。

は じ め に

ピジンとは共通語を持たない人々の間に起こる、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺の言語である。ある種の接触、人的交流の初期の段階では少数の語彙で十分足りるような取引が行われるが、ピジンの統語構造はそうした初期段階の人的交流を効率的に行うために適したものとなっている場合が多い。同時にピジンの多くは接触言語の語法を反映し、標準変種の本質的ではない特徴が捨て去られることにもなる。ピジンは補助言語であって、限定的に使用されるか、拡大されて使用されるかのいずれかのパターンを取るようになる¹⁾。

限定的に使用されるピジンは最小限の取引、接触の結果、生まれるものとなる。したがってある

* 本学助教授 英語・英語教育

** 本学非常勤講師 英語・英語教育

種の接触，人的交流の機会が消滅すれば，ピジン自体が消滅することにもなる。一例を挙げると，ベトナム戦争中に使用されたベトナム英語はこれに相当する。

他方，拡大されて使用されるピジンの場合は，多言語地域において広範に使用され，次第に機能を高度化していく事例も報告されている。

本稿ではピジン英語を分析することにより外国語としての英語を学習することの可能性を探っていくこととする。そしてその事例研究の対象として主にハワイの日系移民の英語を取り上げ詳細に分析することによって，ノンネイティブによるコミュニケーションの手段としての英語とその可能性について検証していくこととする。

第1章 ハワイにおけるピジン英語

1.1 ハワイにおけるピジン英語の事例検証

事例研究として日系ハワイ移民の歴史と彼らの他民族とのコミュニケーションについて考察し，その特徴をまとめていく。ハワイの日系人，あるいはアジア人などによる独特な英語の語彙，文法的な特徴を整理していく。そしてその中から日本人がノンネイティブとして活用できる英語の特性を抽出し，これからの日本の英語教育への示唆としていく。

以下，日系第二世代のハワイ男性の会話をもとにハワイ英語の特徴を事例検証する。会話は友人同士の略式会話である²⁾。

Boy A: Ey, Marcus, wanna go show tonight.

Boy B: Show? Where?

Boy A: How's Waikiki?

Boy B: Waikiki! Shee! All blads, eh?

Boy A: Where you like go then?

Boy B: Me, I no care...any place...up to you. What show you like go?

Boy A: Ah...hope to go Waikiki though.

Boy B: What get?

Boy A: Chee, I think Peyton Place was playin, or something like 'at.

Boy B: Peyton Place! Ey, ey, good movie eh dat.

Boy A: Yeah...

Boy B: Us go then.

Boy A: Yeah, may as well go cause, ah, nothing to do tonight.

Boy B: Okay. You come pick me up?

Boy A: Okay. About what time?

Boy B: Up to you!

Boy A: Ah, about seven o'clock.

Boy B: Okay.

Boy A: Okay.

Boy B: Easy!

以上の会話はハワイにおける典型的なピジン英語による会話となっている。まずはハワイにおけるピジン英語の事例検証として、それぞれの会話文について、標準英語としてはどのように表現するか、標準英語との相違はどこにあるかを一文ずつ分析していくことにする。

Boy A: Ey, Marcus, wanna go show tonight.

【標準英語】 Hey, Marcus, do you wanna go to a show tonight?

【分析】 副詞句 go to a show の前置詞 to と冠詞 a が省略されている。

Boy B: Show? Where?

【標準英語】 A show? Which one?

【分析】 show は「映画」を意味すると推測されるので Where でなく Which one が標準的な英語では使われる。

Boy A: How's Waikiki?

【標準英語】 How (What) about Waikiki?

【分析】 提案する場合は How about～? What about～? が一般的。この文では「ワイキキはどうか」というワイキキの様子を窺っているように聞こえてしまう。

Boy B: Waikiki! Shee! All blads, eh?

【標準英語】 Waikiki! Sheesh! All tourists, huh?

【分析】 blads は「観光客」を意味すると考えられる。

Boy A: Where you like go then?

【標準英語】 Where do you wanna go then?

【分析】 like の目的語である to go の不定詞の to が省略されている。ただし標準的な英語の話者においても go get it というような用法はしばしば見られる。

Boy B: Me, I no care…any place…up to you. What show you like go?

【標準英語】 Me, I don't care…any place…it's up to you. What show do you wanna go?

【分析】 care を否定する don't が no で代用されている。疑問文の助動詞 do が省略されされている。

Boy A: Ah…hope to go Waikiki though.

【標準英語】 I don't know, but I wanna go to Waikiki.

【分析】I hope の主語の省略。hope に関しては標準的な英語の話者においてもしばしば I を省略することがある。標準的な英語では but を用いるため though は必要ない。

Boy B: What get?

【標準英語】What's showing?

【分析】標準的な英語では What get? という表現は存在しない。

Boy A: Chee, I think Peyton Place was playin, or something like 'at.

【標準英語】Well, I think Peyton Place was showing, or something like that.

【分析】something like 'at の 'at は that を意味する。playing を用いるのは日本語の「～がやっている」という表現からの由来の可能性もある。

Boy B: Peyton Place! Ey, ey, good movie eh dat.

【標準英語】Peyton place! Yeah, that a god movie.

【分析】eh dat は that one を意味するが、ここでは標準的な英語とは対応していない。

Boy B: Us go then.

【標準英語】Let's go then.

【分析】主語 we が us で代用されている。未来を現在形 go で表現している。ただし標準的な英語ではこの場合、let's を用いると考えられる。

Boy A: Yeah, may as well go cause, ah, nothing to do tonight.

【標準英語】Yeah, we might as well go cause, there is (I have) nothing to do tonight.

【分析】I が両センテンスにおいて省略されている。また第二センテンスにおいては there is (I have) が省略されている。第一センテンスの may as well は一般的な英語では might as well の方が自然である。

Boy B: Okay. You come pick me up?

【標準英語】Are you gonna pick me up?

【分析】依頼の文であれば you の前に can を入れるのが妥当。また come と pick は動詞であるために to 不定詞または接続詞 and を用いるのが標準英語である。

Boy A: Okay. About what time?

【標準英語】Okay. About what time?

【分析】標準的な英語表現と変わらない。

Boy B: Up to you!

【標準英語】 It's up to you!

【分析】 仮主語 It と be 動詞が省略されている。ただし標準的な英語においても用いられる。

Boy A: Ah, about seven o'clock.

【標準英語】 Okay, about seven o'clock.

【分析】 会話で頻出している ah, eh などは登場する場面によって意味が様々である。

Boy B: Easy!

【標準英語】 See you later!

【分析】 標準英語で話者が別れ際に用いる Take it easy に派生している可能性が高い。

以上、詳細に一文ずつの分析を試みてきたが、このようにハワイ英語の諸表現は一見して標準英語とは相当に異なる。そして本稿を通じて、こうしたハワイ英語の詳細な分析を行うことになるわけであるが、標準英語と文法的、統語的、語彙的な相違が発生した背景として、ハワイの歴史、文化についても考察を深めておく必要がある。次にハワイ英語成立の背景として、ハワイがどのようなかたちでアメリカに組み込まれ、英語社会が形成されていったかをピジン英語の発達という視点を踏まえながら展望していく。

1.2 ハワイ英語の歴史的背景

ハワイの州旗には英国旗ユニオンジャックがデザインされている。はじめてハワイ州旗を目にしたものであれば米国50番目の州であるハワイ州旗のデザインに目を疑うかもしれない。ハワイ州旗は1816年に作成されたものであるが誰がデザインしたかは正確には知られていない。この州旗はハワイの当時の王であったカメハメハの要請によってデザインされた。8本の白、赤、青の横縞模様は8つのハワイ諸島を表している。横縞模様とユニオンジャックは米英両国の商船の船員を喜ばせるためであった。

米国の州でありながら横縞模様とユニオンジャックがデザインされているハワイ州旗こそハワイ社会の多様性を象徴しているといえる。そもそもハワイは18世紀末まではネイティブ・ハワイアンと呼ばれている先住民だけが住んでいた。

ハワイは18世紀末から19世紀前半に重要な歴史的な転換期を迎えた。1778年1月18日にジェームズ・クック船長率いる2隻の船がハワイに到来する。それ以降、これまで存在すら知られていなかったハワイは欧米の地図に書き加えられと同時に欧米の文化や経済、さらに政治的な影響を受けるようになるのである。この頃、ハワイ諸島は3人の王によって分割統治されていたが、白人の持つ武器の知識と技術を利用して1810年にカメハメハによってハワイ諸島統一が成された。カメハメハは政権維持のために白人を積極的に利用していた³⁾。

1.3 ハワイにおけるピジン英語の発達とハワイ語の衰退

世界の海洋航路に組み込まれるという外部社会との接触によってピジョン化された英語がハワイ

にももたらされた。ピジン英語とは、もともと19世紀の中国や東シナ海の海峡植民地で使われた英語の一種であるとされている。「ピジン」はお互いに共通語を持たない人々がコミュニケーションの手段として使用する補助言語であって、いわゆるネイティブスピーカーは存在しない。

ハワイで英語が広まるにしたがい、ハワイ語の話者は大きく減少していくことになる。ハワイにおける英語伝来とハワイ語の話者の減少が急激に進んだ理由の1つとして文字を持たなかったということが挙げられる。人類の歴史の中で文字を持たない言語は支配者の言語の強要によって消滅の運命をたどってきた。

1898年、米国併合によってハワイ政府は英語教育を徹底し、これにともないハワイ諸島でのハワイ語人口は1983年には1,000人を下回ったという。白人との接触によってハワイ語は英語からの借用語が増加した。ハワイ語は、外部の世界を表現する語彙が不足していたことに起因する。欧米文化から流入された物や考えをハワイ語に置き換えることは困難であったという。もともとハワイ語には、欧米の物や概念が存在しなかったためである。

そのため、1820年ごろ、キリスト教の伝道師たちは聖書をハワイ語に翻訳する際に借用語の流入は避けられなかった。伝道師は、文字を持っていなかったハワイ語を表記するために英語のアルファベットで置き換えた。これに加えて「オキナ」と「カハコ」と呼ばれる記号が用いられた。母音 AEIOU、子音 HKLMNPW のアルファベット計12文字が使われた。

その際、伝道師たちはハワイ語の T と K, L と R, B と P の音の違いを聞き分けることができなかった。というのも本来、12以上の発音があったとされるハワイ語であったが言語の専門家でない伝道師には完璧な聞き取りができていなかったようである。

このようにハワイ語の衰退の原因は、ハワイ語そのものに西洋文明と対応した語句が存在しなかったために借用が進んだということにある。またハワイ王室が英語教育に対して熱心であったということなども衰退の理由に挙げられる。しかし最大の原因は、アメリカ統治による英語教育の徹底であったと考えられる。

1.4 ハワイ移民の労働

カメハメハの死後、ネイティブ・ハワイアンたちは、西洋の物品を手に入れるために白壇（びゃくだん）・捕鯨・サトウキビといったハワイ資源を取引していた。これにともないハワイに住む白人の数は着実に増加していった。そして白人のハワイ王朝における影響力は次第に強まり、彼らは徐々にハワイ社会の実権を握るようになっていった。白人の中には巨大サトウキビ・プランテーションを経営し巨万の富を手にするものも現れた。こうしてハワイにおけるサトウキビ生産は拡大し続けていった。当初、砂糖産業に従事する労働力は現地調達されていたものの欧米からもたらされた疫病によってネイティブ・ハワイアンの人口は激減し、サトウキビ畑で働く労働力の不足を補うために海外からの労働力に依存されるようになった。

1852年 The Royal Hawaiian Agricultural Society は中国から195人の契約労働者をハワイに移住させることに成功した。その後たくさんの中国人が移民してくるようになった。しかし中国人労働者の中には、契約期間であった3年を終えると帰国する者や、サトウキビ・プランテーションを離れて貯めた金で商売するものや農業を営む者が多かった。

当時、アメリカ本土では増加する中国人に対する偏見と差別が強まり中国人排斥運動が起こっていた。ハワイでも中国人がサトウキビ・プランテーションでの契約後、商売をするようになると白人の生活を脅かすようになりハワイ政府は中国人の移民を制限するようになった。

1898年、ハワイがアメリカに併合されると事実上、中国からのハワイへの移住は不可能となった。この頃、米国では南北戦争以降、南部の砂糖の北部への流通が遮断されていた。

1861年には1ポンドあたり4セントであった砂糖の値が1864年には25セントまで高騰した。南部からの砂糖の供給が不可能になった北部では、ハワイを砂糖の供給源とした。それまで572トンであったハワイの砂糖の輸出はこれを機に一気に8865トンまで増加した。1876年には米国のハワイの砂糖への関税障壁が取り払われた。こうしてプランテーション経営者は砂糖をハワイの主要産物と考え豊富な資本によって生産、金融、運輸を支配するようになっていたのである⁴⁾。

1.5 日本からの移民

日本からの149名の移民が1868年にはじめて公式に入植した。この年、明治元年の入植ということで彼らは「元年者」と呼ばれた。元年者の多くは、農作業には不慣れで、経営者と賃金や労働条件をめぐる対立していたためにそのほとんどがプランテーションを離れてしまった。

その後、1885年に労働力不足に悩むハワイと外貨獲得を目的とした日本政府との利害が一致し、日本からの官約労働移民が増加した。さらに民間会社による移住が1894年からはじまった。こうした移民は契約移民と呼ばれていた。

様々な移民から構成されるプランテーションにおいてコミュニケーションの手段としての共通語は不可欠であった。最初は、ハワイのピジン英語がその役割を果たし、その後、いくつかのピジンへと発達していった。1870年代に移民した人々は、ハワイ生活で家庭を持つようになる。子ども達は家では両親の言語を学び、学校では英語を学んだ。こうした中、ハワイではハワイ語や移民の母語（特にポルトガル語）に影響を受けてピジン英語が発展していった。これらのハワイのピジン英語は20世紀の変わり目にもたらされたものである。

1920年代までにはハワイで生まれ育った者はハワイのピジン英語を第一言語として用いるようになり、この頃までには大多数はハワイピジン英語の話者となっていったのである⁵⁾。

第2章 ハワイにおけるピジン英語の特徴

2.1 英語における借用語

ハワイで話される英語（ハワイ英語）には多くの借用語が見られる。英語には日本独特の表現が英語化した借用語が多く見られるが、ハワイで話される英語については標準的な米語で使用される日本語からの借用語以外にもハワイの地域特性と適応した独特の表現が多々見られる。

ハワイ英語の借用語を分析する前にまず、英語における英語化した日本語を取り上げ、その特徴を考えてみる。

日本独特の表現として英語化された標準英語及びハワイ英語の代表的なものとしては、日本人の衣食住、芸術、伝統文化などに関するものが図1のように含まれている。英語に入ってきた日本語は多岐に及ぶ。ハワイ英語についても同様な傾向が見られることになる。

	日本語独特の表現からの英語の借用語	ハワイ英語における日本語独特の表現からの借用語
「食」に関連するもの	弁当 みそ 寿司 豆腐	meat
「住」に関連するもの	旅館 障子 布団	bed clothes
「衣」に関連するもの	下駄 着物	eye-glass
芸術・文化	盆栽 柔道	alphabet

* 諸資料をもとに筆者が独自で作成

図1 標準英語とハワイ英語における借用語の対比

2.2 ハワイ英語における日本語の影響

ハワイ英語における日本語の影響は名詞のみならず形容詞、副詞、統語など広範に及ぶが名詞に関しては日本語の名詞を直訳的なかたちで英語に移入したもの、あるいは借用語としてそのまま英語化したものなどもある。

以下、図1にあげたハワイにおけるいくつかの典型的な日本語の影響を受けたハワイ英語の名詞を紹介する⁶⁾。

meat

ハワイ英語では「牛肉」の意味で使われるが、日本語で肉というと牛肉を指す場合が多いことに起因した表現である。

bed clothes

アメリカ英語では *bed clothes* は *blanket, sheets* を意味することになり、*night clothes* は、*pajamas, gowns* の意味となる。しかしハワイ英語では *bed clothes* は、その両方の意味をカバーすることになる。そして、日本語からの借用語、*shing* (寝具) が、*bed, sleeping gear* の意味や *bed clothes, cover* の意味でも使われることになっている。すでにアメリカの標準的な英語でも *futon* (布団) は英語になっているが、ハワイ英語でも同様であり、しかもその使用方法は幅広いことが確認されている。

eye-glass

spectacles や *glasses* の意味で *eye-glass* を使うのはハワイ語 *makaaniani* の影響であるが、複数形ではなく単数形で使うのは日本語などの干渉を受けているからとも考えられる。

alphabet

letter の意味で使われる。日本語などの影響と思われる。

glass cup

drinking glass の意味である。

文法事項	ハワイ英語の対応	例 文
過去	wen で表す	Dey wen paint his skin. (They painted his skin.)
未来	go, goh, gona で表す	You gon turn in your paper late? (Are you going to turn in your paper late?)
場所	stay を用いる	Da cat stay in da house. (That cat's in the house.)
進行形	動詞の前に stay を付ける	Da cat stay eat da fish. (That cat is eating the fish.)
否定文	動詞がない時は not を入れて表現する	Now you not da head man. (Now you're not the head man.)
過去形の否定文	never を動詞の前に置いて表現する	I never do em. (I didn't do it.)
there is/there are	get で表す	Get too much tourist nowadays. (There are too many tourists nowadays.)
there was/were	had で表す	Had dis old green house. (There was this old green house.)
there isn't/aren't	no more が代わりに用いられる	No more kaukau in da house. (There isn't any food in the house.)
習慣や普遍的な事実または聞き手が周知している過去	動詞の原形で表す	Da cat eat fish. (That cat eats fish.)

(出所) <http://www.une.edu.au/langnet/hce.htm/grammar-hce> を参考に作成

図2 ハワイ英語の文法的特徴

2.3 ハワイ英語の文法的特徴

ハワイのピジン英語は、19世紀の終わりから20世紀の初頭にかけてプランテーションの労働者のコミュニケーションの手段であった。現在、ハワイでは学校や職場で標準的な英語を学べる。しかしハワイの人々は、家庭では、標準的な英語からハワイ英語に戻してコミュニケーションをとる。ハワイ英語には、ハワイ特有の習慣・気質、外国語からの借用語、ティーンエイジャーの表現、俗語が盛り込まれている。文法的な特徴として、ハワイの人々は、ハワイ特有の助動詞を発展させた。

図2は主としてハワイの第二世代以降にみられる英語表現の特徴を図にまとめたものである。過去時制を wen で現す、未来時制を go, goh, gona で表すといったところが大きな特徴となっている。この他、過去の習慣や進行形についても標準英語とは大きな差異がある。また、否定形の使い方や there is 構文についても標準英語とは大きく異なる特徴が見られる。

小 括

サトウキビ畑の移民が単純な意思伝達的手段として取り入れた初期のハワイのピジン英語は、世代を重ねることによりその使用者数は拡大し、一定の文法体系を持つようになった。その結果、ハワイ語という母国語の干渉を受けても話しやすいかたちで英語を消化することとなった。

こうしたハワイにおけるピジン英語の発達の過程を日本の英語教育にも応用することが可能かどうか本稿(Ⅱ)において探っていくこととしたい。

注

- 1) ピジンに関する定義については、次の文献を参考とした。Loreto Todd, *Pidgins and Creoles* (New York: Routledge and Paul, 1974)
- 2) Elizabeth Ball Carr, *Da Kine Talk* (Honolulu: UP of Hawaii, 1972) 44-49.
- 3) 矢口祐人『ハワイの歴史と文化』(東京：中央公論新社，2002年) 12-60.
- 4) Elizabeth Ball Carr, 3-13.
- 5) 矢口祐人, 31-35.
- 6) Elizabeth Ball Carr, 119-158.

Works Consulted

- Andrew, Lorrin. *A Dictionary of the Hawaiian Language*. Honolulu: Board of Commissioners of the Public Archives of the Territory of Hawaii. 1922.
- Bailey, Beth and David Farber. *The First Strange Place: Race and Sex in World War II Hawaii*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1992.
- Car, Elizabeth Ball. *Da Kine Talk*. Honolulu: University Press of Hawaii, 1972.
- Kuykendall, Ralph. *The Hawaiian Kingdom*. Honolulu: University Hawaii Press, 1967.
- Pride, J. B. *New English*. Rowley: Newbury House, 1982.
- Sakoda, Kent, *Pidgin Grammar: An Introduction to the Creole Language of Hawaii*, New York: Bess Pr Inc, 2003.
- Todd, Loreto. *Pidgins and Creole*. New York: Routledge and Kegan Paul, 1974.
- Valdman, Albert. *Pidgins and Creole Linguistics*. Bloomington: Indiana University Press, 1977.

邦語参考文献

- 池澤夏樹『ハワイ紀行 完全版』東京：新潮社，2000年
- 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』東京：ミネルヴァ書房，1997年
- 中嶋弓子『ハワイ・さまよえる楽園：民族と国家の衝突』東京：東京書籍，1993年
- 矢口祐人『ハワイの歴史と文化』東京：中央公論新社，2002年
- 山中速人『ハワイ』東京：岩波書店，1993年
- ハルミ・ベフ『日系アメリカ人の歩みと現在』京都：人文書院，2002年
- ロバート・マクラム，ウィリアム・克蘭，ロバート・マクニール『英語物語 The Story Of English』東京：文藝春秋，1989年